

2012年8月よりアメリカ合衆国カリフォルニア大学バークレー校工学部 Applied Science and Technology 博士課程に所属しています、森です。渡米していつの間にか1年と数ヶ月が経過していました。簡単に近況等をレポートします。

1. 口述試験との戦い編

一般的にアメリカの博士課程では、Qualifying Exam (通称 Qual) という試験があります。コレに不合格すると、博士課程からキックアウト、つまり、退学やら、マスターコースへ移されたりします。バークレーでは、Qual とは別に Preliminary Exam (通称 Prelim) という試験もあります。これもまた、Qual と同様に不合格するとキックアウトです。例え普段の授業の成績がオール A でも、これらの試験に堕ちると全てが水の泡へと帰します。

大体1年目の終わりに Prelim を受け、その後研究の進み方次第で Qual を受けるという形になっています。大学全体としての規定で定められている試験は Qual のみで、Prelim はそれぞれの学科が好きでやっている試験です。つまり、Prelim の形態は筆記試験だったり、口述試験だったりと学科で異なり、もしくは Prelim が無いという非常に羨ましい学科もあります。

僕の学科では、Prelim は3つの試験科目を自分で決め、それぞれの科目について1人の教授を試験委員として依頼し、合計4人(それぞれの科目の試験委員3人+自分の所属しているラボの教授)の試験委員会を設定し、口述で試験委員会から出される質問に答えていく、という形態をとっています。試験委員になる事を教授達に依頼して委員会をつくる事はもちろん、彼らのそれぞれのスケジュールにあわせて試験日程を決めるという事自体も全て自分でやらなければいけず、まずコレが地味にしんどいのですが、試験自体も中々しんどいものでした。

僕は割かし筆記試験には強い(と思っている)のですが、口述試験となると全く話は別で、本当に苦手です。ただでさえアガリ症な僕は、教授達に囲まれるや否や、心拍数は跳ね上がり、おおよそ理解しがたい文法も発音もめちゃくちゃな英語を話し始めてしまいます。また、特に範囲の決まって無い試験なので、どこまで深く質問されるか等、その科目の教授の気分次第なので、勉強する際もどこまでやっていいのか全くわからず、いつもの定期試験とは違う得体の知れない恐怖を感じながら対策をたてていました。

科目の設定と試験委員である教授達の選択を若干ミスった僕は、途方に暮れつつも、「まあでもなんだかんだなんとかなるっしょ!」という半ばヤケクソな軽い気持ちで試験に挑んだのですが、見事に粉碎しました。そう、堕ちてしまいました。

試験終了後、受験者は部屋の外に出され、しばらく委員会が話し合いをして、その

後ドアが開き、その場で結果を伝えられます。僕も外に出され、ドアが開くまでの約15分間「やべえー、やっちまったなこりゃ」と187回くらい心の中で呟き、「縄にする？炭にする？それともク、ス、リ？」と51回ほど自殺の方法について考えを巡らせました。結果を告げられた瞬間、ポケモンで誰しもが体験したであろう「めのまえがまっくらになった！」的な状況に陥り、ポケモンにハマっていた小学生の頃に思考はとびました。おそらく人間って本当にショックな事があると、とりあえずなんだか全く関係無い事に思考を巡らせ逃避しようとするのでしょうか。にしても逃避先がポケモンって全く意味不明ですね（ちなみにBGMはシオントウンの音楽でした）。

さて、結果を告げられる際に不合格になった理由を説明されるのですが、いくつかあげられた理由の中で印象深かったものは「口述でのパフォーマンスと、今までの成績とのギャップが大きい。」「数式に頼り過ぎ。現象の本質を定性的に説明できるようになるべき。」という事でした。確かに身に覚えのある、とても的確な指摘でした。が、しかし、ショックのあまり、心の荒みきった僕は「じゃあ成績悪かった方が受かったのかよ！数式から導けるのも重要じゃんか！」と泣きながら指導教官と試験委員長に逆ギレしました。筆記試験は答案全体の点数で決まりますが、口述試験はある意味不公平なモノで、1つわからないとそこで止まってしまい、アウトになります。教授の気まぐれで知らない事を聞かれたら、他のたくさんの方はわかっている、それでアウト。しかも教授に依って、合否の甘さも全く違ったりもします。「なんてアンフェアな試験なのだ！！」と（完全に自己防衛の心理に依る）怒りが爆発していました。その後も数日間の心の荒みっぷりは凄まじく、友人の「大丈夫？」「これからどうするの？」といった優しい言葉に関しても、「別に…」とアレっぽい感じの悪い返答ばかりしていました。どうかしていました。反省しています。

兎にも角にも、もう一度だけチャンスが与えられました。一回目は「墮ちても最悪もう一回あるし」という（性根の腐った）余裕があったのですが、後が無くなり、再試験までの数ヶ月間はとてもストレスフルなものとなりました。授業と研究もちよろちよろとこなしつつ、数式だけ導いてなんだか満足する、という変態的な勉強スタイルからなるべく脱却して、かつ、英語でも出し入れ自由な active knowledge を増やす事を重視しました。心の荒れ方も中々でしたが、この間の肌荒れ（柔軟剤に依るものではない）もすさまじく、未だに完治していません。思春期か！と思わずツッコミをいれたいくなるようなレベルで、人生で一番のニキビ（この歳になるとニキビとは呼ばずに吹き出物と呼ぶみたいですね…悲しいものです）っぷりを発揮しています。

試験が徐々に近づいてくると、「やる事やったと思うし、もうどうしようもない、あとは本当に運次第だろ」というリラックスしようとする気持ちと、「やばいやばいやばい死ぬ死ぬ死ぬ」という追いつめられた小動物のような全く余裕の無い気持ちが重なり合い、挙動不審になってきました。「ああ、きっと死刑前日の死刑囚ってこう

「さすがだわー、さすがアメリカ博士課程だわー、あまり観たく無い方向（自分のダメさや未来への絶望）にまで視野が広がっていったらわー、さすがだわー」と、視野がグイグイと広がっていく（というか偏っていく）のを体感しました。

試験本番は、自分のペースを保って進行させる事を意識し、ややテンション高めで答えていくといつの間にかすんなりサクッと終わりました。規定時間よりかなり早めに終わりを告げられたので、「バ…バカな…か…簡単すぎる…あっけなさすぎる！」「これはさすがに堕ちてないだろっ！」と合格を確信した思いも巡らせつつも、結果報告までの間は、（普段から多動症気味な僕ですが）落ち着きというものを完全に忘れ、まるで上野動物園にいるシロクマのように、同じところをずっとグルグルといたりきたりしていました。ドアが開き結果を伝えられた際には喜びというよりはただひたすらホッとしました。何はともあれ受かってよかったです。

Prelimなんて所詮ザコい試験（終わったからなんでも言える）ですが、ソレ故に自分のクソみたいなしょぼいプライドや、汚いダメな部分を見つめ直す、いいきっかけにもなったかと思えます。やっとこれで研究や自分のやりたい事に集中できる状況になったので、次は無難に Qual に合格できるように精進していこうと思えます。

2. なんだかやる気がでない時期編

上記のように、とてもストレスフルで切羽詰まった時期を過ごしましたが、全くやる気がでなくなって、無気力な期間がちらほらとありました。自分なりに、「ああ最近全く頑張れてないな」という期間です。

ふとした瞬間にどうしても日本が恋しくなって、日本の友人達がとても楽しそうに見えて、そこで頑張っている素晴らしい人達が異常に眩しく見えるときがあるかと思えます。以前までは、やる気がでない時は、豚がトリュフを探し当てるように、私もフゴフゴと Facebook や Twitter 等の SNS 上においてそういった日本の楽しそうな様子を探し当てては、無理矢理に斜に構え、幸せそうにしている人たちをディスリ倒す、という残念で哀れな行為を行っていました。こういうイラっとするものを観る行為って一見するとストレス溜まるだけですが、実は結構アドレナリンがものすごくでる感じがして、やる気がムクムクとわいてきます。「こいつらには負けないぜ！」と超絶に負な感情を原動力としたやる気が沸き上がり、結果何故か勉強も捗ります。

しかし、こういったある意味リーサルウェポン的なやる気のドーピングに限界を感じました。「他人は他人だな…」という至極当たり前な事実気付（本当は気付いていたけど見て見ぬフリをして、無理矢理ドーピングしていた感も否認ませんが）、つるりとしたゆで卵のような気持ちが芽生えてしまったのです。そうなってくると、その他にやる気ドーピング方法を知らない器の小さな（ついでに脳も小さな）人

間ですので、路頭に迷い込んでしまいます。

そしてついに訪れたのです、ドーピングの効かない状態での、「なんとなく」やる気のでない時期が。その時期っていうのは、もうやらなすぎる自分へのストレスが溜まるくせに、そのストレスでモヤモヤして何も手につかないという、わけのわからないループに入り、「あ、こうやって引きこもりニートってできるんじゃない？」とか思っっては「‘じゃん?’ じゃねえよ誰にきいてんだコイツ！」とセルフツッコミしてみたり、路上詩人のコモディティ化の進んだ薄っぺらなあざとい詩に共感するサブカル女子のように、「わかる、わかるわ～」と言いながらニート系のドキュメンタリーをネットで観て共感、そして調子いい時にはそれに涙するレベルでした。まだ路上詩人の詩に共感する方がマトモかもしれません。

「なんなの？この状態。むしろこの状態の原因を突き止め、改善する事ができたらもう世の中からニートいなくなっちゃうんじゃないかな？あれ、これとれちゃう？ノーベル平和賞(?)とれちゃう？」と死ぬ程（本当に死ぬ程）無意味な自問自答を繰り返していくうちに、結果として出た解決策は、「やらない」というややトンチのきいたものでした。「やらない」というのは、余計な事をやらない、変に頑張ろうとしない、という、つまり単純に普通に暮らす事です。軽く運動して、よく寝て、(そこそこ)食べて、時には友人と雑談してみたり、という、普通に暮らしていると、いつの間にかやる気もでてきて、比較的早く負の連鎖期間を脱出できたかと思います。他にも、徹底的に何もやらない(文字通り、本当に動かない)を貫いて(僕はコレを不動心(やらずの心)と名付けています。)、己の罪悪感の限界を越え、その限界を越えた罪悪感によって、先ほどの記述したわけのわからないやる気でないループを突き破る、という力技も発見しました(あくまで僕にとってはコレが効果的だった、という話です)。

アメリカ PhD 課程は5年以上にも及ぶ、先の長いものです。まだまだ僕は1年と数ヶ月過ぎた程度ですが、これからは変に焦らず、かといって変に怠けずに、長い目でやる気を継続できるように、適度なストレスを保ちつつ、緩やかにやっていきたいです。

3. 最後に、編

ダメな部分ばかり綴った反省文のような報告書になってしまい、申し訳ありません。ダメな部分ばかり書きすぎて、「こいつ本当にダメなヤツだな」と思う部分が多々あるかと思いますが、これを読んだ誰かが「こんなダメなヤツでもアメリカで PhD しているなら自分でもできるんじゃないかな」と思ってくれたら最高だな、と思います(正当化)。これからも自分のダメな部分を見つめて直していきたいです。というかここにきて自分の事をダメダメ言い過ぎてさすがに勝手に凹んできました。